

D. カシモヴァ氏の近著『ウイグリヤ』について

海野 典子

はじめに

本稿は、2012～14年にカザフスタンで刊行されたD. カシモヴァ女史（Дилинур Касымова、以下カシモヴァ氏と表記）の著書『ウイグリヤ』を紹介する。「ウイグリヤ」とは、中華人民共和国の西端に位置する新疆ウイグル自治区やその周辺地域を漠然と指す地域概念として、同書で用いられている言葉である。『ウイグリヤ』は、著者の新疆旅行記を中心としたウイグル人の歴史や文化に関する随筆であり、厳密な意味での学術書ではない。だが、漢語で「西域」や「回疆」「新疆」、ペルシア語で「モグーリスタン」「トルキスタン」などと呼称されてきた当該地域を、旧ソ連領中央アジア出身のウイグル人知識人が「ウイグリヤ」という概念を用いていかに認識しているのかを知るうえで、興味深い事例を提示してくれるものと思われる⁽¹⁾。

実は、『ウイグリヤ』には、2012年にアルマトゥで刊行されたロシア語版 [Касымова 2012] と、2014年に新たに刊行されたロシア語版 [Касымова 2014a]、及びその現代ウイグル語訳 [Касымова 2014b]、カザフ語訳 [Касымова 2014c]、英語訳 [Касымова 2014d] の計五つのヴァージョンが存在する。これらのうち、Касымова [2014a] Касымова [2014b] が一冊に、Касымова [2014c] Касымова [2014d] が別の一冊にまとめられており、ウイグル語とカザフ語は改良キリル文字で表記されている。本稿では、著者がロシア語とウイグル語のバイリンガルであることから、Касымова [2014a] Касымова [2014b]、すなわち『ウイグリヤ——謎に満ちた、遠くて近い』（原題：*Уйгурия. Загадочная, далекая и близкая*）、及び『ウイグリヤ——親愛なる、勇敢で、孤独な』（原題：*Уйгурия. Өзизанә, шәһиданә, гәрибанә*）の記述に原則として従うことにする。なお、全213頁のКасымова [2012] に比べて、新版の

⁽¹⁾ 20世紀前半における新疆出身のテュルク系ムスリムの民族意識や「ウイグル」アイデンティティの形成過程については、[王 1995] [大石 2001] [Roberts 2009] [Brophy 2011] [清水 2011] [田中 2013] を参照されたい。

Касымова [2014a] は 161 頁とやや短くなっているが、これは主に写真の挿入箇所・頁数が異なるためであり、内容自体に大きな違いがあるわけではない。

著者略歴と『ウイグリヤ』の装丁について

『ウイグリヤ』の著者、カシモヴァ氏は、1960 年代にカザフスタンのジェズカズガンのウイグル人家庭に生まれた。中国領のグルジャ出身の両親は、文化大革命で故郷を追われた他のウイグル人やカザフ人とともに、1960 年代初頭にソ連領へ亡命し、コルホーズで労働に従事した経歴をもつ。一家はやがて、幼い著者を連れてクルグズ共和国のフルンゼ市（現ビシュケク市）に移住した [Касымова 2014a: 26–28, Касымова 2014b: 192–195]。その後、著者はカザフスタンで高等教育を受け、カザフスタン共和国科学アカデミーなどでウイグル人の歴史や文化に関する研究に打ち込んだという。「ウイグル学の専門家」[Касымова 2014b: 164] を自認する著者は、近年は外国人へのウイグル語指導にも熱心に取り組んでおり、2005 年にはロシア語で書かれたウイグル語教科書 [Касымова 2005] を上梓している。

なお、著者の父親で、高名な詩人であったとされるジャマルディン・カシモフ氏は、1980、90 年代にソ連領中央アジアのウイグル人文化団体設立のために奔走したが、志半ばで逝去したという [Касымова 2014a: 26–28, Касымова 2014b: 192–195]。同氏はおそらく、クルグズ共和国のウイグル人文化団体として知られる、イッティパク⁽¹⁾ の前身である 1982 年設立のサダの活動にも関与していたと考えられる。このような家庭環境も関係してか、アルマトゥ在住のカシモヴァ氏は、クルグズ共和国のウイグル人社会においても知識人として重要な地位にあり、イッティパクの人々とも積極的に交流を続けているようである。本稿で取り上げる『ウイグリヤ』も、現在ビシュケクのアラトー広場脇に位置するイッティパクのオフィスで購入可能である。

『ウイグリヤ』の奥付によれば、同書は、「ウイグリヤ」に関する複数回の調査によって、著者が独自に入手した資料を基に書かれた。具体的な訪問期間は明かされていないものの、著者が実際に訪問した八つの「ウイグリヤ」のオアシス都市——ウルムチ、グルジャ、トルファン、クチャ、カシュガル、ホータン、ヤルカンド、ロプノール——における見聞が同書の主な内容である [Касымова 2014a: 1, Касымова 2014b: 164]。同書を手にとった際まず目を引くのは、表紙に描かれた、太陽に紅く染まったタクラマカン沙漠と、ヤルカンド・ハン国の創始者として知られるスルタン・サイードの墓廟である。これらを背景にして、古代ウイ

⁽¹⁾ イッティパクの設立過程やクルグズ共和国のウイグル人社会については、水谷 [2012] にくわしい。

グル文字の傍らにキリル文字で書名があらわれているというデザインは、旧版・新版のいずれにも共通している。さらに、約30頁にわたって収録されている新疆の都市、自然、人々の生活、古代遺跡やモスク、歴史的人物の肖像画などのカラー写真の多くは、著者が新疆旅行中に自ら撮影したものであり、「ウイグリヤ」に対する著者の視点を理解するうえで有用である。

『ウイグリヤ』の内容

ここでは、『ウイグリヤ』の構成、及び各章の内容を紹介したい。

まず、本書の序文に相当する「シルクロードにおけるウイグリヤ」[Касымова 2014a: 1-17, Касымова 2014b: 165-182]では、古代から現代に至るまで、さまざまな文明が興亡を繰り返してきた「ウイグリヤ」の歴史を概観する。東西交渉の中継地として数々の旅行家や探検家を魅了してきた「ウイグリヤ」が20世紀以降、ソ連や中国をはじめとする周辺大国に翻弄され、1930、40年代の東トルキスタン共和国政権も短命に終わった経緯が整理されている。

次に、「無敵のグルジャ」[Касымова 2014a: 18-45, Касымова 2014b: 183-215]では、1944年にかの地で起きたいわゆる三区革命を中心として、ソ連、中国国民党、中国共産党、ウイグル人指導者の複雑な関係が説明される。また、「教育と文化に非常に熱心な」グルジャの人々の生活、「ウイグルの伝統的な娯楽的集まり」[藤山 2005: 2]と言われるマシュラップ、「ウイグル人マハツラ（コミュニティ）の冠婚葬祭時の纏め役」であるジギトベシ[水谷 2012: 181]の活動などが紹介されている。

続いて、「不思議なカシュガル」[Касымова 2014a: 46-60, Касымова 2014b: 215-234]では、マフムード・カシュガリーやホージャ・アーファークのマザール（聖者廟）をはじめとする名勝古跡を巡る。古より翡翠の名産地であったとされるカシュガルが、ユーラシアをつなぐ交易・文化交流の道として栄えた歴史に思いを馳せながらも、伝統的な街並みや歴史的建造物が近代化の名の下に目まぐるしい速度で破壊されていく様子を「恐ろしい」と形容する。

「勇敢なホータン」[Касымова 2014a: 61-72, Касымова 2014b: 234-248]では、翡翠や絨毯市場を散策し、活気あふれる日曜市で土地の美食を楽しむ様子が描写される。だが、環境破壊による深刻な沙漠化現象は、著者をして「悲劇」と言わしめた。また、著者は「チェチェン人のような」風貌をしたホータンの人々が話すウイグル語の発音の独特さ、乞食の多さにも驚きを隠さない。

1～3世紀に栄えたクシャーナ朝の領域であったとされる「神秘的なクチャ」[Касымова

2014a: 72–88, Касымова 2014b: 248–267]を訪れた著者は、数々の考古学的遺物や歴史建造物に触れ、「仏教はインドからウイグリヤの領域に伝来し、それからシルクロードを通過して中国の方へ、東へと広まっていった」として、ユーラシア大陸の文化伝播における「ウイグリヤ」の重要性を強調する。また、ウイグル人の伝統医学やクチャの歴史を簡単に紹介している。

クチャの次に著者が訪れた「比類なきヤルカンド」[Касымова 2014a: 88–97, Касымова 2014b: 267–278]は、16世紀にヤルカンド・ハン国のアブドゥル・ラシード・ハンの妻として、ウイグル人の伝統音楽の基礎となる十二ムカームをまとめたとされる、アマニサハンの伝説が残る土地である。著者は、アマニサハンとアブドゥル・ラシード・ハンの運命的な出会い、十二ムカーム誕生の歴史を、詳細かつ情感豊かに語る。

著者が「町全体が博物館である」と評する「要塞トルファン」[Касымова 2014a: 97–114, Касымова 2014b: 278–299]では、高昌故城やベゼクリク千仏洞、火焰山や複数のマザールを訪れた後、うだるような暑さで疲れた身体を葡萄棚で癒し、天山山脈からの雪解け水を導くカレーズ（地下水路）を称賛する。また、トルファンの人々はやや気難しいところがあり、ムスリムではあるが仏教文化の伝統を維持していると、率直な感想を述べている。

「魔法のタクラマカン」[Касымова 2014a: 114–124, Касымова 2014b: 299–311]では、タリム盆地のタクラマカン沙漠北東部にかつて存在したとされる都市、楼蘭（現地名は *Kirorayna* などと推定されている）を調査したスウェーデン人のスヴェン・ヘディンや日本の大谷探検隊をはじめとする各国の探検家たちの活動、「さまよえる湖」ロプノールの不思議や「楼蘭の美女」と呼ばれるミイラの謎が語られる。1960年代以降、ロプノール実験場付近を中心に行われた、中国政府主導の核実験を非難する著者の舌鋒は鋭い。

「ウイグリヤ」の現状に対する厳しい認識は、「ウルムチ——石で覆われた街」[Касымова 2014a: 124–146, Касымова 2014b: 311–335]においても確認される。ウルムチ市内の大学のロシア語コースで教鞭をとった経験をもつという著者は、同市の人口に漢族が占める割合が非常に多いこと、いわゆる「双語（バイリンガル）教育」政策下でウイグル語を話すことのできないウイグル人が増えていることに、強い危機感を覚えている。また、中国国内で時差が設定されていないため、実際には二時間程度の時差があるにもかかわらず、ウイグル人も北京時間に従って生活しなければならないこと、ウイグル人の伝統芸能を維持・発展させるための民族劇場が見当たらないこと、大気汚染が深刻であることに関して、不満をあらわにしている。

最後に、著者は新疆滞在中に出会った「人々」[Касымова 2014a: 146–159, Касымова 2014b: 335–349]についても記録している。たとえば、新疆在住のウイグル人の言語学者や歴史家、ウイグル語や「ウイグリヤ」の歴史を学びに来た世界各地の若手研究者についての記述は、著者の交友関係の広さを物語っている。なお、目次には反映されていないが、巻末

には参考文献リストが付されている。

「ウイグリヤ」と「中国」

『ウイグリヤ』全編を通して貫かれているのは、「ウイグル」であることに対する著者の強烈なこだわりである。「ウイグリヤ」は、ユーラシアの文明揺籃の地、東西交渉の重要な中継地点として極めて好意的に描かれている。「ウイグル人」や「ウイグリヤ」があたかも古代から一貫して存在し続けているかのように、過去の輝かしい栄光の歴史が語られるのである。一方、「中国」や「中国人」に対する見解は痛烈な批判を含んでいることが多々ある。基本的に「中国」は、「ウイグリヤ」を占領してその伝統文化を横取りし、ウイグル人を抑圧する存在として描写されており、現在の「ウイグリヤ」が抱える環境破壊や民族文化の衰退といった問題の責任は、「中国」の強制的な同化政策や「中国人」の道徳心の欠如に帰するとされる。総じて「ウイグリヤ」は過度に理想化され、ウイグル人の多様性が強調される一方、「中国」「中国人」は画一的なステレオタイプのイメージで語られるという傾向が強い。著者の目には、「中国」は「監獄」[Касымова 2014a: 9, Касымова 2014b: 173]とさえ映るようである。

このような叙述傾向は、しかし、著者が過激な政治的主張を好むことを意味しない。むしろ『ウイグリヤ』からは、カスィモヴァ氏が旧ソ連領中央アジア出身のウイグル人知識人という立場に立って、現代新疆の現状を客観的に把握することに努めている様子がうかがえる。そのためか、ウイグル人の現状を嘆いて未来を憂い、民族文化の保護や発展を希望する叙述が同書の大半を占めるものの、政治的議論はおそらく意図的に避けられている。可能な限り中立的であろうとする著者の姿勢は、同書において、東トルキスタン独立運動の歴史を背景として強い政治的意味合いをもつ「東トルキスタン」*Шərқий Түркистан* という言葉の代わりに、「ウイグリヤ」という概念が用いられていることにも表れているのではないかと思われる。さらに、「ウイグリヤ」という表現には、ペルシア語で「トルコ人の土地」を意味する「トルキスタン」概念を用いて「トルコ的」であることを強調するよりも、何よりも第一に「ウイグル」でありたい、「中国人でもウイグル人でもない」人々、すなわち *минкохан*（「民考漢」*minkaohan*⁽¹⁾）のことを指すと思われる）[Касымова2014a: 135, Касымова2014b: 323]に

⁽¹⁾ 幼少期から漢族の学校に通い、高校卒業後にも漢語の大学入学試験を受験する少数民族の受験生、及びそのようにして大学に入学した学生や卒業生を意味する漢語の語彙。これとは対照的に、「民考民」は、子供の頃から民族学校で勉強し、民族言語の大学入試を受験する学生のことを指す。現代新疆における「民考漢」については、[希日娜依・賈蘇提、大谷 2011]を参照されたい。

はなりたくない（なって欲しくない）という著者の願望が反映されているようでもある。

余談になるが、「ウイグリア」は人名でもある。近年、中国国内のウイグル人のあいだで、女兒に「ウイグリア」と名付けるのが一種の流行となっているらしい。筆者が複数のウイグル人に尋ねたところ、「ウイグリア」という名前には、たしかに民族文化や故郷に対する特別な思いが込められてはいるが、不思議と柔らかく、明るい響きをもつ名前であるという。日本人名で言えば、「大和（やまと）」という名前に近いニュアンスであろうかと想像される。とすれば、『ウイグリア』における「ウイグリア」概念もまた、「東トルキスタン」や「ウイグルスタン」（ウイグル人の土地）といった特定の政治的立場に偏っていると理解されがちな語彙の代わりに用いることで、ウイグル人としての強烈な自己意識を柔和に表現する効用があるのではないかと考えられる。

無論、「ウイグリア」概念の形成過程に関しては、他の資料と照らし合わせて複眼的かつ慎重に検討すべきであり、『ウイグリア』におけるカシモヴァ氏の記述だけを判断材料にすることはできない。だが、「ウイグリア」という新しい地域概念を堂々と掲げた同書が、世界各地のウイグル人社会でどのように評価され、いかなる影響力をもちうるのかについて、今後注視していく必要があるだろう。

参考文献

<日本語>

- 王柯 1995『東トルキスタン共和国研究:中国のイスラムと民族問題』東京:東京大学出版会。
- 大石真一郎 2001「テュルク語定期刊行物における『ウイグル』民族名称の出現と定着」『東欧・中央ユーラシアの近代とネーションⅡ（スラブ研究センター研究報告シリーズ）』北海道大学スラブ研究センター、49-61頁。
- 希日娜依・買蘇提、大谷順子 2011「新疆ウイグル自治区の特有群体「民考漢」：ウルムチ市のウイグル人を事例として」愛知大学現代中国学会編『中国21』34、281-302頁。
- 清水由里子 2011『『新生活』紙にみる「ウイグル」民族意識再考』『中央大学アジア史研究』35、45-69頁。
- 田中周 2013「民族名称「ウイグル」の出現と採用」鈴木隆・田中周編『転換期中国の政治と社会集団（WICCS研究叢書2）』国際書院、181-207頁。
- 藤山正二郎 2005「ウイグルのマッシュラップ」『福岡県立大学人間社会学部紀要』13（2）、1-13頁。
- 水谷尚子 2012「キルギス共和国のウイグル人」『麗澤大学紀要』94、177-203頁。

< 欧文諸語 >

- Brophy, David. 2011. *Tending to Unite?-- The Origins of Uyghur Nationalism*. (Unpublished doctoral dissertation, Harvard University, Massachusetts, U.S.)
- Касымова, Дилинур. 2005. *Уйгурский язык: Самоучитель*. Алматы: Ғылым.
- . 2012. *Уйгурия: Загадочная, далекая и близкая*. Алматы: Мир.
- . 2014a. *Уйгурия. Загадочная, далекая и близкая (Путевые заметки, исследования, наблюдения)*. Алматы: Мир.
- . 2014b. *Әзизанә, шаһиданә, герибанә Уйгурия (Йол хатирилири, тәтқиқатлар, күзитишләр)*. Алмута: МИР нәшрияти. Translated by Шеривахун Баратов.
- . 2014c. *Алыс та, жақын жұмбақты Ұйғұрия (Жол жазбалары, зерттеулер, бақылаулар)*. Алматы: МИР. Translated by Тұрғараева Г. М.
- . 2014d. *Uyghuriya. Mysterious, so far away so close (travel notes, researches and observations)*. Almaty: Publishing House « MIR ». Translated by Madina Imanova.
- Roberts, Sean R. 2009. “Imagining Uyghurstan: re-evaluating the birth of the modern Uyghur nation”, *Central Asian Survey*, 28(4), p.361–381.

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)